

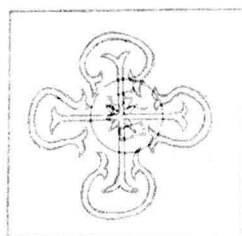
坂口安吾著

日本文化私觀

文
體
社

昭和十八年十二月一日印
昭和十八年十二月五日第一刷發行

出版會承認 あ481024號
2000部



著者略歴。東洋大
學印度哲學科卒。
著書『黒谷村』
『爐邊夜話集』等。

定價 日本文化私観
一圓八十錢
特別行爲税
和當額 十 錢
合計 一圓九十錢

著者 坂口安吾

發行者 宇野千代

印刷者 土屋信平

東京都麹町區麹町二丁目五番地

發行所 文體社

電話九段(33)〇五四二番
振替口座東京九八九四三番
會員番號 一二八一二四

配給先

東京都神田區
淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

(六五二一東京) 社刷印堂賞一

(落丁・亂丁の場合は直接小店へ御申出下さい)

名著複刻全集 近代文学館 昭和44年9月

(田中製本)

坂口安吾著

日本文化私觀

文體社刊

日本文化私觀

目次

日本文化私観

.....

七

日本的といふこと

俗悪に就て（人間は人間を）

家に就て

美に就て

青春論

.....

六

わが青春

淪落に就て

宮 本 武 藏
再 び わ が 青 春

FARCE に 就 て 一七

大井廣介といふ男 一五
——並びに註文ひとつの事——

文學のふるさと 一五

長 島 の 死 一〇一

附 エスキス・スタンダール（遺稿）..... 長 島 幸 二七

日本文化私觀

一「日本的」といふこと

僕は日本の古代文化に就て殆んど知識を持つてゐない。ブルーノ・タウトが絶讃する桂離宮も見ることがなく、玉泉も大雅堂も竹田も鐵齋も知らないのである。況んや、泰藏六だの竹源齋師など名前すら聞いたことがなく、第一、めつたに旅行することがないので、祖國のあの町この村も、風俗も、山河も知らないのだ。タウトによれば日本に於ける最も俗惡な都市だといふ新潟市に僕は生れ、彼の蔑み嫌ふところの上野から銀座への街、ネオン・サインを僕は愛す。茶の湯の法式など全然知らない代りには、猥りに酔ひ痴れることをのみ知り、孤獨の家居にゐて、床の間などといふものに一顧を與へたこともない。

けれども、そのやうな僕の生活が、祖國の光輝ある古代文化の傳統を見失つたといふ理由で、貧困なものだとは考へてゐない（然し、ほかの理由で、貧困だといふ内省には悩まされてゐるのだが――）。

タウトはある日、竹田の愛好家といふさる日本の富豪の招待を受けた。客は十名餘りであつた。主人は女中の手をかりず、自分で倉庫と座敷の間を往復し、一幅づつの掛物を持參して床の間へ吊し一同に披露して、又、別の掛物を取りに行く、名畫が一同を楽しませることを自分の喜びとしてゐるのである。終つて、座を變へ、茶の湯と、禮儀正しい食膳を供したといふ。かういふ生活が「古代文化の傳統を見失はない」ために、内面的に豊富な生活だと言ふに至つては内面なるものの目安が餘り安直で滅茶苦茶な話だけでも、然し、無論、文化の傳統を見失つた僕の方が（そのために）豊富である筈もない。

いつかコクトオが、日本へ來たとき、日本人がどうして和服を着ないのだらうと言つて、日本が母國の傳統を忘れ、歐米化に汲々たる有様を嘆いたのであつた。成程、フランスといふ國は不思議な國である。戦争が始ると、先づまづさきに避難したのはルーヴル博物館の陳列品と金塊で、巴里の保存のために祖國の運命を換へてしまつた。彼等は傳統の遺産を受繼いできたが、祖國の傳統

を生むべきものが、又、彼等自身に外ならぬことを全然知らないやうである。

傳統とは何か？ 國民性とは何か？ 日本人には必然の性格があつて、どうしても和服を發明し、それを着なければならぬやうな決定的な素因があるのたらうか。

講談を読むと、我々の祖先は甚だ復讐心が強く、乞食となり、草の根を分けて仇を探し廻つてゐる。そのサムライが終つてからまだ七八十年しか経たないのに、これはもう、我々にとつては夢の中の物語である。今日の日本人は、凡そ、あらゆる國民の中で、恐らく最も憎惡心の尠い國民の中の一つである。僕がまだ學生時代の話であるが、アテネ・フランセでロベール先生の歡迎會があり、テーブルには名札が置かれ席が定まつてゐて、どういふわけだか僕だけ外國人の間にはさまれ、眞正面はコット先生であつた。コット先生は菜食主義者だから、たつた一人獻立が別で、オートミルのやうなものばかり食つてゐる。僕は相手がなくて退屈だから、先生の食欲ばかり専ら觀察してゐたが、猛烈な

速力で、一度匙をとりあげると口と皿の間を快速力で往復させ食べ終るまで下へ置かず、僕が肉を一きれ食ふうちに、オートミルを一皿すすり込んでしまふ。先生が胃弱になるのは尤もだと思つた。テーブルスビーチが始つた。コット先生が立上つた。と、先生の聲は沈痛なもので、突然、クレマンソーの追悼演説を始めたのである。クレマンソーは前大戦のフランスの首相、虎とよばれた決闘好きの政治家だが、丁度その日の新聞に彼の死去が報せられたのであつた。

コット先生はボルテール流のニヒリストで、無神論者であつた。エレヂヤの詩を最も愛し、好んでボルテールのエピグラムを學生に教へ、又、自ら好んで誦む。だから先生が人の死に就て思想を通したものでない直接の感傷で語らうなごとは、僕は夢にも思はなかつた。僕は先生の演説が冗談だと思つた。今に一度にひつくり返すユーモアが用意されてゐるのだらうと考へたのだ。けれども先生の演説は、沈痛から悲痛になり、もはや冗談ではないことがハッキリ分つたのである。あんまり思ひもよらないことだつたので、僕は呆氣にとられ、思

はず、笑ひだしてしまつた。——その時の先生の眼を僕は生涯忘れることができない。先生は、殺しても尙あきたりぬ血に飢ゑた憎惡を凝らして、僕を睨んだのだ。

このやうな眼は日本人には無いのである。僕は一度もこのやうな眼を日本人に見たことはなかつた。その後も特に意識して注意したが、一度も出會つたことがない。つまり、このやうな憎惡が、日本人には無いのである。『三國志』に於ける憎惡、『チャタレイ夫人の戀人』に於ける憎惡、血に飢ゑ、八ッ裂にしても尙あき足りぬといふ憎しみは日本人には殆んどない。昨日の敵は今日の友といふ甘さが、むしろ日本人に共有の感情だ。凡そ仇討にふさはしくない自分達であることを、恐らく多くの日本人が痛感してゐるに相違ない。長年月にわたつて徹底的に憎み通すことすら不可能にちかく、せむせむ「食ひつきさうな」眼付ぐらゐが限界なのである。

傳統とか、國民性とよばれるものにも、時として、このやうな欺瞞が隠され

てゐる。凡そ自分の性情にうらはらな習慣や傳統を、恰も生來の希願のやうに背負はなければならないのである。だから、昔日本に行はれてゐたことが、昔行はれてゐたために、日本本來のものだといふことは成立たない。外國に於て行はれ、日本には行はれてゐなかつた習慣が、實は日本人に最もふさはしいことも有り得るし、日本に於て行はれて、外國には行はれなかつた習慣が、實は外國人にふさはしいことも有り得るのだ。模倣ではなく、發見だ。ゲーテがシエクスピアの作品に暗示を受けて自分の傑作を書きあげたやうに、個性を尊重する藝術に於てすら、模倣から發見への過程は最も屢々行はれる。インスピレーションは、多く模倣の精神から出發して、發見によつて結實する。

キモノとは何ぞや？ 洋服との交流が千年ばかり遅かつただけだ。さうして、限られた手法以外に、新らたな發明を暗示する別の手法が興へられなかつただけである。日本人の貧弱な體軀が特にキモノを生みだしたのではない。日本人にはキモノのみが美しいわけでもない。外國の恰幅のよい男達の和服姿が、我

我よりも立派に見えるに極つてゐる。

小學生の頃、萬代橋といふ信濃川の河口にかかつてゐる木橋がとりこはされて、川幅を半分に埋めたとて鐵橋にするといふので、長い期間、悲しい思ひをしただことがあつた。日本一の木橋がなくなり、川幅が狭くなつて、自分の誇りがなくなることが、身を切られる切なさであつたのだ。その不思議な悲しみ方が今では夢のやうな思ひ出だ。このやうな悲しみ方は、成人するにつれ、又、その物との交渉が成人につれて深まりながら、却つて薄れる一方であつた。さうして、今では、木橋が鐵橋に代り、川幅の狭められたことが、悲しくないばかりか、極めて當然だと考へる。然し、このやうな變化は、僕のみではないだらう。多くの日本人は、故郷の古い姿が破壊されて、歐米風な建物が出現するたびに、悲しみよりも、むしろ喜びを感じる。新しい交通機關も必要だし、エレベーターも必要だ。傳統の美だの日本本來の姿などといふものよりも、より便利な生活が必要なのである。京都の寺や奈良の佛像が全滅しても困らないが、